

今年は「帰依処」という講題が与えられているのですが、これは私が出したんじゃないんです。このごろご縁があつてあちらこちらと行くんですけども、中には「今度のテーマ、課題、講題は何ですか」と聞きますと、「別に決めてありませんからあなたのご自由にお話しになってください。」というのがちょいちょいあるんです。僕はあんまりあんなの好かんのです。「ご自由に」といっていかにもこちらを尊重しているようにすけれども、自分に問題がないということです。だから問題のないところに行って問題のない人に話をしても変なものです。それで僕が行くんだからぜひ共に考えたいという、そういう今の問題を明確にして、それを私に知らせてくださいと、ずうっとそういうことを言ってきたんです。

そういうことが大地の会のお世話をしている人の耳に入ったんか入らんのかそれは分かりませんが、今年は「帰依処」という講題をいただきました。さっき偉そうなことを言いましたけれども、実は講題をいただくことによって、こっちの方がはっきりさせられるのですね。講題をいただくことはいただいた講題が私の課題になる。嫌でもそのことを皆さんと一緒に考えて参りましょうということで、実は私のやり方がずるいのかも知れませぬ。

それで今度「帰依処」という講題をいただいたんです。ところがいただいてみるとですね、私の方がどうしていいのか、ある意味で困っているわけですけども、「帰依処」というこういう講題が出てきたということは、題を出された方にとって帰依処ということがどういう意味で問題になっているのか。宮城先生のお話の中にも、いわゆる「帰依三宝」、化身土巻の末巻、とくに重要なことを押さえられて「念仏、念法、念僧」という三帰依ということをお話くださったんですけども、これはまあいろんな意味がございましょうけれども、いまでも皆さん方と一緒に「自ら仏に帰依したてまつる」と言うたところなんです。

そして皆さん方はそういうときにどういう事をお感じになっているのか分かりませんけれども、私は本当言うたら皆さん方と一緒に「自ら仏に帰依したてまつる」と「自ら法に帰依したてまつる」こう言うて帰ればそれでいいんです。そのために出てきたんです。“何で出てきたのかなあ”というところでですね、念仏、念法、念僧、皆さん方と共にこの時代社会の真っ只中で、ここにこそ私の帰依処がある。その喜びですね。その喜びといいますか感動といいますか、あり得べからざるその場所がここにちゃんと開かれておるんです。

それで、こういうことは……困りましたなあ、ほんとに困りましたなあ。どう言うていいんか分からんです。実は言葉ということがずっと問題になっているんですが、そろそろ横道にそれそうですね。だんだん年を取って来ますとですね、一つのことを話そうとすると、フイツと話が横道に行くんです。そしてその横道から枝道に行つて、帰るところを忘れてしまうんです。それで話が全くまとまらんことになるんですけども、困りましたなあ。

私はある意味でこの親鸞聖人のお言葉をいただき、それからまた善きひと、私にとっては善きひとと申し上げねばならない方がたくさんいらっしゃいますが、その方の言葉がはたしていただけたのかどうかという、いただいたつもりでおるんですけども、ということは言葉というこれも一つの表現でございますね。だからしばしば、先ほども大河内先生にお尋ねしとったんですけども、たとえば我々の使っている言葉は日本語という一つの歴史と世界をずっと伝えて、しかも私たちが言葉になっている。我々はものを考えるといいますけれども、日本語の中でもものを考えているわけですし、思想は自由であるとか言いますが、私は決して思想は無制限に自由だとは思いません。現実には、私ならばものを考える場合には、日本語という一つの世界の中で考えているんですから、そこから自由になるわけにはまいらんとします。

そうすると浄土真宗というのはそういう意味では変な言い方ですけども、日本語というのは民族の業でございませぬ。我々は仏法を聞いておるといふけれども、民族の業の中で聞いておる。そういうことを避けることができないのではないかなと僕は思うんですけども。そしてそのことが案外問題にならない。そういうところに言葉のもつておるやっかいな問題がございませぬ。

ですから仏教が中国の言葉に翻訳され『大無量寿経』だけでも異本が五つもあるという。そして親鸞聖人は『仏説無量寿経』だけではなく多くの異本、『如来会』とか、とくに『如来会』がたくさん出てきますが、そういうことを引いていらっしゃるんですけども、よほど親鸞さまも言葉ということに深く思いをひそめて、その言葉となった世界、その日本語となった世界はけっして日本人固有の世界ではない。十方衆生にあまねく開かれたその世界が、たまたま日本語という一つの表現をとったということですね。だからこそ三国流伝ということがありますので、それで言葉というものの二面性ですね。一つは普遍性を伝える。特殊な言葉でもって普遍性を伝える。世界中の人々に共通の言葉というものはございませんね。

私は、学生時代にエスペラント語というのがございましたけども、あれは人間が造った言葉でして、ですから世界中に共通の言葉というものはありません。あるのはみんな民族の言葉です。ところがその民族の言葉を通して命を生きる一切のものに鳴り響くようなそういう普遍、永遠にして普遍なる世界に会った人がそれを言葉で表現してくださった。それで私どもがこの会でずっと先生方のご講義を聴いてきたんですけども、そこで先生方のお話しを通して十方衆生に開かれた真実、真実といいますか真理といいますか、これも宮城先生がしょっちゅう言われるんですが、われわれが真理というものを対象的に、それを向こうに置いてそれを理解する、了解するというものじゃないわけですね。真理ということは真実を生きるということ、お浄土という世界をどれだけ解説し、お浄土という世界はどれだけ説明してみたってそれはお浄土にはならん。だから浄土というのはそこに生まれなければ話にならんですね。

だから往生ということが、とくに親鸞聖人においては成仏というよりもむしろ往生、そこに生まれる、その浄土に生まれるのはいつかという、親鸞聖人は「念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき」、いわゆる現前において浄土が開かれる。我々の方から言いますとこれは適切ではないかも知れませんが、われわれはお念仏申すところにおいてお浄土の世界を、身は娑婆にありながらお浄土の世界を経験することができる。いつでもどこでも経験することができる。知識があらうとなかろうと、学識があらうとなかろうと、人生の経験が豊かであらうとなかろうと関係ないというんですね。すべていたるところでお浄土が開かれる。いうならば誰でもがそのお浄土と、これも表現ですね。浄土ということも表現ですよ。客観的に実体的にどこかに浄土があるというわけではないわけでしょうね。浄土の世界を生まれ、そしてそこに生きそれを経験し続けていった人がその世界を浄土という言葉で表現してくださったに違いございません。

こないだも北陸で、北陸というところは、このごろの北陸というのは昔のようではございませんけれども、まあそれでもずうっと何十年聴聞を重ねていらっしゃるいわゆるお同行といわれる方々がいらっしゃいますけれども、一番はっきりしないのはお浄土がはっきりしないんですね。いろいろお話しをしていますと浄土真宗、浄土真宗というけれども、お浄土が一番曖昧なんです。お話しをしていますと。そしてお浄土というのは本当にあるんだろうとか、死んだらお浄土に行けますかとか、そういう素朴な表現で出てくるので、変な話でしてねえ。浄土真宗を名乗っている真宗門徒が一番肝心な浄土がはっきりしない。はっきりしないのならばそれを徹底的にその浄土を学ばねばならんのですが、分からんくせにお浄土はいつも話されたことがないんです。信心談議は非常に盛んなんです。信心談議は盛んなんですけど、お浄土の問題が本当にみんなの共通の話題になって話が盛り上がったということがあまりないですね。僕の経験では。どうですかね。浄土がない浄土真宗。この間もね、浄土というものはあるんですかと。中には、僕が浄土浄土というと、あんなこと言っとるけど言っとる人が浄土が分かっているのだろかなどと言われるのですが、私は「お浄土はあります。」と言うんです。行ったことがあるかと言われるから、さあ、それも問題だけどね、浄土という言葉がある限り浄土はある。その浄土に生まれた人々が何万何十万とおられて、そしてその人の中から浄土という言葉が生まれてきた。だから言葉がある限り浄土はあると言わなければならん。浄土に生まれた人がいらっしゃる。浄土を生きてきた人がいらっしゃる。そういう意味をもっていると思いますね。言葉というのは。

ところが僕らはそういう言葉に触れないで言葉の解釈ばかりしているのです。なんぼ解釈しても浄土は現前しません。浄土というの皆さんご存じのように親鸞聖人では「土は無量光明土、仏は不可思議光如来」といって光りという言葉でおっしゃっているわけです。光りというのは宮城先生のお話しだったか宗先生の

お話しだったか忘れましたけども、いわゆるこれは名詞ではなくて動詞ですね。光りというのは光りに照らされたものが光りとか呼ぶんです。私の身と関係がないようなものは光りではないですね。私の身を照らした、照らされたものが光りとか呼ぶんであって、したがってお浄土を光りと、光りという言葉で表される限り、それは今もこの場所に働き続けていらっしゃる。親鸞聖人はその光りを「智慧のかたち」であるとおっしゃいますが、要するに、何かこう私どもが北陸におりまして、小さいときからお浄土という言葉は知っておりましてけれども、いつのまにかそれを、実体的などかにそういう国があるとぼんやり思うてきました。それがいろいろ自分の問題が出てきてそしていろんな先生方にお話しを聴聞しております間に、お浄土というのはけっしてそういうものではなくて、現に今ここにいる私に対して働き続け、照らし続け、呼びかけ続けていらっしゃる、大いなるお働き、その働きに会ったものがそこに開かれる世界を浄土と、清浄なる国土と、こういうふうに表示してくださった。したがって私どもはそういう言葉を通して浄土の生を共にするということが始まるわけでございましょう。

二

ですからその、また話が横に行きましたが、「帰依処」という講題を話していたんですね。その帰依処という講題が出たということは、出された人がもう一つ帰依処がはっきりしませんと。だからこのことについてもうちょっと帰依処といわれているそのことがどういう内容をもっているのか、ということがあるのかも知れません。そうでなければ、今度は私に対して“汝の帰依処を述べよ”とこういうことがあるのかも知れません。そうすると私は嫌でも私の帰依処を述べなけりゃならんということになります。

ところがこれがまた厄介なんですね。述べればいいのかというとそんなわけにもいかんですね。別に述べる必要もない。それに生きておったら。どうですかね。話がややこしくてどうもなんのです。それを口で述べるとしますと言葉の制約があるんです。どういう制約があるかということ、僕は今話していますが、いろんな違った矛盾した内容を一口で一度に同時に表現することはできませんね。だからお話しをするという話の前後次第にしたがって話をしませんと、話が一向に通じません。ところが前後次第にしたがって話をしますと今度は話者も聞く者もその一つの言葉の論理といいますか言葉の合理性、言葉の整合性ということがどうしてもひっかかるんですね。前後次第して話したことが同時にといってもなかなか難しいですね。

だから、『歎異抄』第一章などもみな深い意味をいただいているのでしょうけれども、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりとしんじて念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、」と前後次第するんです。「弥陀の誓願不思議」「たすけられる」それから「往生をとげる」そして「念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき」、そうするとこれはどっちが先なんやろなあということになるんですね。ますます分からんようになるんです。だからそういう点で言葉というものの一つの約束事といいますかね、僕らが自然に頭に入れているところの言葉に対する一つの言葉の論理、言葉の整合性、そういうものにしたがって親鸞聖人の、実際には話を聞いておるんですけども、それが果たして聞いたと言えるのかとこういう問題が全部何か一言いうと必ずそういう問題がついてくるわけですね。私も今までそんな言葉の厄介さというものをあまり知りませんでした。それでどう了解したらいいのか、どういただいたらいいのかということにいろいろ苦労して、今も卒業したわけではありませんがますます問題が深まって行きますけれども。

それでどうもそういうことを、“汝の帰依処を述べよ”とこう言われましてどうも困ってしまう。で、考えてみると実は述べ終わってしもうたんですね。一番最初にここに出てきて。「まさに願わくは衆生とともに」いわゆる帰依仏、帰依法、帰依僧。それが私の依り所である。いうことを皆さんの前に表白いたしました。そしてこれはご存じのように「三帰依」ということは世界中の仏教徒が、パーリ語でいいますと「ブッダン サラナン ガッチャーミ」ああいうことを、たとえばインドでブダガヤで聞きますというと、チベットから来た人も中国から来た人も、ともかく仏教徒はみなそこでその三帰依の偈を唱和してそしてそこになんて言いますかね、うまく言えませんが浄土を感ずるんでしょうなあ。民族を越え言葉を越え時代を越え、そしてそこに浄土を生きてきた人の歴史と社会、そういうものを全面的に身で感ずるわけですね。それで皆非

常に感動するわけです。

だからこれは仏教徒である限りすべて共通する一つの「三帰戒」とも言っておりますが、共通するものでございますけれども、真宗でもこのごろ推進員の養成講座が終わると、あるいは最近になって帰敬式が末寺でも行われるようになりましたけれども、必ずこの三帰依文をやります。私もいまやりましたけれども、朝の晨朝法話でもこの三帰依文をおっしゃるお方が多くなりました。

しかし実はこの仏法僧の三宝というものは、これを集約したといいますか変な言い方ですが、それがこのこと一つということになって、我々に開示されたものが浄土真宗だと思います。それは何かというと、本願を宗とし仏の名号をもって体とす、とこう言われています。はっきり言ってしまえば「なんまんだぶつ」です。なんまんだぶつが仏であり法であり、こういう意味をもっていますね。ですから我々真宗門徒は南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏というときに常に仏法僧の三宝を、生活の中で常に繰り返し繰り返しそのことを実感してきた。そしてそれがたんに自分一個の経験世界ではなくて、それがいうならば、命生きる一切衆生のついの拠り所である、ということのをそれこそ如実に感じてきたと思います。

それは、今日ここへ集まられた方はどちらかと言いますとインテリの方が多いのですけれど、このごろはちょっと厄介なことになりましてね、日本中どんな田舎に行ってもインテリばかりになったんです。「文字をもしらぬいなかのひとびと」なんてのはほとんどいなくなりました。けれども僕らの子供のころにはまだいらっしやいましたね。文字をもしらぬいなかのひとびと。

私は、また話が横道に行きますが、私は兵隊に行っても、兵隊に行きますと昔の現役でたいい兵隊というのはほとんど農村山村漁村の青年ばかりでした。義務教育6年やと終わったばかりで、そして二十歳になると兵隊検査を受けて兵役に来たんです。僕は徴兵猶予というのがありまして、大学すむまで兵隊検査を延ばしてもうて、すんでから五つか六つ年下の青年たちと一緒に兵隊検査を受けて軍隊に入るんです。高等教育を受けていますと、昔の制度でいいますとたいい見習い士官になってしばらくしてすぐ少尉に任官するというのが普通でしたけれども、僕は最後まで二等兵、一等兵、上等兵、兵長、最後まで兵隊で帰ってきたんですがね。それで南方に行ってから、手紙は一通も来ないで、まったく島に棄民として捨てられたのが実情なんですけど、内地から一本も手紙がこんのですよ。たまに一辺ですかね。内地におったときには来るんです。そうするとね、夜寝るとと地方から出てきた青年が「おい、これワリャ読んでくれ」というんです。漢字を平仮名に変えてね、ワシに読めるようにしてくれというんです。「ああ、わかったわかった」と言うてですね平仮名にしますとね、「息つくところがない、息つくところをつくってくれ」というんです。そんなことが決して珍しいことでなかった。そういう人ばかりですよ。また話横に行ったな。僕らは真宗を共に学ぶといっているが、そういう人達と共に学んだことがないのではないかなと思うんです。だから十方衆生とか一切衆生とかいいますけどね、どうもそういう人達と学ぶということがなかったんでないかなあと思うんです。

こんな話をしていると時間なんぼあっても足りませんがね、後でまた触れることがあるかも知れませんが、親鸞聖人という方はですね、実はこういう人々によって学ばれたというか、教えられたというか、そういう人によって親鸞聖人が、自ら心得たと思われた信心が、何一つそういう人達に触れる信心ではないということのを嫌になるほど知られたお方でないかなと思うんです。これも最近になってひとしおその感じが深いんですが、八十才をよほど過ぎられてから、「浄土宗のひとは愚者になって往生す」と法然聖人がおっしゃったということが、非常に懐かしい思いを込めてお手紙の中に出て参ります。親鸞聖人にとってはこういう人々、しかもこういう人々こそが本願の正機であるということをおっしゃいました。

これは歴史の事実に合わせて言いますと、覚如さんの書かれた『御伝鈔』、親鸞聖人、法然上人が承元の法難によって流罪になったと。お師匠法然上人は配流に処せられたと。もし法然上人が配流にならなかったならば、私も配所におもむくことはなかったであろう。私があの越後の文化果つる所、その越後の、まるで都におったら人間のように見えないですね。また話が横に行きますが、ヨーロッパの人が船で東南アジアのああいうところに行くと、陸で働いているのを見てあれ人間でないといって何か動物が動いていると言ったという記録がありますがね、おそらく人間として見られなかったんでしょう。辺鄙の群類というんですから。都

人から見たら越後の辺鄙の群類などはもう人間として見られなかったんでしょう。それで、もしお師匠様が配流に処せられなかったならば、私もまたそのような文化果つる辺鄙の所へ行くことはなかっただろう。私がもし配所に行かなかったらどうして辺鄙の群類を本願海に引入することができたであろうか。これまた「師教の恩致なり」といって喜んでいらっしゃるんですがね。なんやら分かったような分からん話ですね。

というのは、私が思いますのは、実は辺鄙の群類によって救われたのは親鸞さまではなかったかと。親鸞さまは法然上人の膝下におってですね、「建仁辛の酉の暦雑行を棄てて本願に帰」したと。こう大きな感動と喜びをもって宣言されたんでしょうね。29歳の時ですね。そして35歳で越後に行かれたら、その親鸞聖人の一切群生を摂取不捨の利益に預けしめられるんだといわれていたその念仏の信心が一向に通用しなかったのではなかったかと思うんですね。越後の人々に。そのことによってですね、親鸞聖人が改めていただいたはずの信心がいったい何だったのか、ということを経験されるということがそういう人々にあって、私の信心が根こそぎ問われるようになったということがこれまた「師教の恩致」である。こういう意味があるんじゃないかと思うんですね。

それで、何を話しているのか分からんようになりました。要するに我々は念仏、信心、とこう言っておりますけれども、要するに親鸞聖人が会われた「遇いがたくして今遇うことを得た」という言葉で言っているんですが、そういうものが転回、宮城先生の言葉で言いますと回心ということがありますが、我々は回心なくしてその事実を了解しようと、こういう大きな過ちと言いますかね、過ちというにはあまりにも根は深いのですけれども、浄土真宗によって私の世界が破られ開かれるというよりも、むしろ私の世界の中で浄土真宗を了解している。みなそちらの方を選ぶのではないですかね。気持ちがいいですからね。破られるのは大嫌いですから。だからそういうところに私たちが真宗に会ったと思っていることが、真宗の内だ内だと思っていることが、実は外におるんだと。そういうことを親鸞さまの言葉で、このごろしきりに駄目押しをされるんですけども。

三

まあそれでですね、再び問題を元に返しましてですね、本願と名号というのは別のものではありませんから、「なんまんだぶつ」が帰依処であるといってもよろしいし、「本願に帰す」とこうおっしゃるんですから、本願が帰依処であるといってもよろしいし、浄土に帰するとこうおっしゃるんですから浄土を帰依処としてもいい。同じことですから。ところが今言いましたように、私にとって汝の帰依処はどこかと言われたらもう明々白々でございます。ただ念仏申すところに、そこに私の帰依処が現前しておる。「念仏申さんとおもいたつところのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたもうなり」この「すなわち」というこれは現前ということでしょう。

私は信仰が生きておるということは、それは現前性をもっておることだと思うんです。過去の思い出を引きずるのでもなければ、未来の世界をこれから開こうというのでもなければ、浄土というのは念仏の所に現前する。現前の救いでなければ救いに値しないということですね。このごろそういうことが気になるのですが、もう一つはですね、「願わくはもろもろの衆生と共に」という信心の公共性でございますよ。万人と共に。これは宮城先生の言葉で言いますと、主観性に陥るのでもなく、観念の世界でもないんだと。お浄土というのは開かれた世界、私が本当に救われるということは、命生きる一切のものが救われるということなんだと。命生きる一切のものが救われるというときに、はじめてその救いによって私が救われるのだと。それが自覚的に言われるときには「親鸞一人がためなりけり」とこういう表現になりますけれども、しかしその内容は私一個の救い、命生きる一切衆生の救いと別に私一個の救いはあるわけではない。そうでなければ救いに値しない。救いと言いながら差別である。

ですから今の言葉でいえばそのように一切のものと共にということを同朋と、御同朋という言葉で表すんですが、いわゆる現前ということは「即得」「速疾」という言葉で現前性を表します。それから平等とい

う言葉はいわゆる御同朋という言葉で今言っているのではなかろうかと思うんですね。この二つが生活の中で常に、新しく新しく実感されて行くと言いますかね、信心もろうたらこれで大丈夫だというんでなしに、生活の中で命あらん限りそれが実感されて、信心の救済の現前性と救済の公共性とが常に実感されていく。どうして実感されて行くのかというと、ただ念仏ひとつ。だから我々は具体的には如来の本願によって救われるとかいいますけれども、具体的には念仏によって救われるのでしょう。念仏のところにすでに浄土がある。念仏のところにすでに往生あり。念仏というところにすでに同朋あり。

だから先ほどのお話しで帰依処がいまなぜ問題になるか。それはまあちょっと、私のこのごろ何かにつけて感じている言葉でいいますと、実はすべては念仏がはっきりしないから。念仏念仏と言っとるけれども、その念仏がどうも生きた念仏でない。親鸞聖人のいわれる本願力回向の念仏ではない。そうすると僕らの考えている念仏とは何だろうということですね。どうですかね、ご本山にもこのごろちょこちょこ呼び出されては研修会に行くんですが、「ただ念仏して」といわれる念仏についてあまり話し合いがないんです。念仏といえども、いろんなことをいえば言えますけれども、しかし称名念仏ですね。「大行とは、無碍光如来の名を称するなり」、あのときの「称」というのはたんに称名ということに終わるのか終わらないのか、そのところは微妙な問題がありますが、それから「弥陀大悲の誓願を、ふかく信ぜんひとはみな、ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏をとなうべし」と、親鸞さまはそのほかにもいろいろお念仏申すということを書いていらっしゃる。

ところが、我々はそういうお念仏ということは知っとるんですけど、私はときどきご本派の会合に行くとドキッとします。みんなが「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と高唱念仏するもんですから僕はびっくりしてですね、ドキッとしますんですけど、これは大谷派だけですかね、真宗十派の中で、晨朝にいても念仏の声が全然聞こえません。今日は私のすぐそばにいた地方からきたお婆ちゃんがひとり「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」といってらっしゃいましたけどね、お念仏の声が大谷派では立ち枯れになって消えてしまったんですね。まあそういう言い方をするとまたいろんなことが思い出されて来るんですけども、僕はなんにも「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と高唱念仏をしなけりゃいかんと、そんなことを言っているのじゃないんですけどね、何か念仏という言葉でいわれる深い宗教感覚、感情、そういう言い方もあまり良くないですけどね、現に私に浄土を開き、同朋を開いてくださるのは念仏。その念仏が涸れてしまった、だから浄土もはっきりしないし帰依処もはっきりしない。そういうことがあるいは言えるのではないかなあと。

と申しますことは、念仏申すということをしなやかといったらやっとなるですよ。「なむあみだ、なむあみだ」とやっとなるですよ。実際は。実際はやっとなるですけどね、ところがただやっとなる。要するにその口にただ念仏を、これはお勤めの念仏になっとるんだからということと無意識に念仏をする。あるいは念仏ということはどういうことであるか、それを心の中で観念をする。あるいは念仏ということにどういう深い意味があるか、ということの学解ということと解明して行く、ということであって、そういうことなしに、先ほどいいましたように、全くその辺鄙の群類といわれるそういう人達が実は、これは蓮如さまのころにも同じ状況があったと思うんですが、人々を立ち上がらせたものが実は念仏なんです。蓮如さまのご化導なんてものは決して難しいものじゃないんですね。実に言葉としては平板な、きわめて簡潔なことをおっしゃった。その簡潔な言葉を通して人々の中に燃え上がるような力と情熱が一举に吹き出したんです。そういうことが、どちらかといいますと、我々の研修会の中から力が弱くなってきたような気がするわけでございます。ということは念仏申しながら南無することがない。浄土真宗といいながら浄土が一向に働きとして働くということがない。それから浄土を説いたもろもろの經典、師釈、これはいま読もうと思えばことごとく読むことができます。昔は大変でございますね。ご講師の講録をあの人が持っているのと聞くと、わざわざ出掛けて行ってですね、何日にもわたってそれを筆写してそして持って帰る。そういう苦勞をしたんです。つまり、今はまあ私的・了解の範囲を出ることができないということがあるんでないかと思うんですね。

これも一つの近代の特徴でしてね、信仰とか宗教とかというものが非常に知的に了解されることになってきた。しかし、ちょっと言葉は語弊がありますけれども、信仰というものは生きておったらむしろ知的というよりも、情動的なもの、あるいは欲求意志、意志的なものではないかと思うんですね。日本の宗教という

のは今まではむしろ情感的な世界でありましたけれども、その中であって親鸞の浄土真宗というのは、本当に一番深い人間としての要求、その要求に目覚め要求に生きて行くという、そういうある意味で意志的なのが浄土真宗というのではないかなあということを思うんですが。

親鸞さまは化身土本巻のところに、いわゆる「義によりて語に依らざるべし」ということを申されます。蓮如は「くちにただ称名ばかりをととなえたらば、極楽に往生すべきようにおもえり。それはおおきにおぼつかなき次第なり」と、時代を隔てて、いったい念仏するということはどういうことなんだと。念仏ということも一つの表現です。しかしそれは真実が叫んだ、真実の呼びかけ、名告りであるし、また親鸞さまや蓮如さまの所におった人はまさに凛々として鳴り響く名告りとして聞いたんでしょう。それが聞名ということであらうと思うんです。

なんで念仏がそれほどの生きる力と感動を人々に呼び覚まし呼び起こして行ったのか、ということですね。これもうまく言えませんが、そこで一つ問題になりますのが、言葉としていいますと、同朋会運動が始まりましてから、最近になって、まあ最近でもありませんが、さかんに言われてきたことは「命」という言葉です。命の願い、如来の本願をいう場合、命の願いといって参りました。さかんに使われるんですけども、これは日本語です。本願といえばこれは日本語ではありません。その場合にいままで本願ということをも命の願いという日本語で言っていました。私はこれは必ずしも間違いではないと思います。間違いではないと思いますけども、その命という日本語そのものの内容が急速に変わってきておるんですね。明治以後。命という言葉は使っとるけれども、本来の日本語のもっておった命という内容を全く失ってしまった。それで命の願いに呼び覚まされ、命の願いに生きると言いますが、その言葉自体が内容を失っているのではないかと、こういうことも一つ気になることでございます。

四

あまり時間がございません。私のお話しをすることが全然まとまっていなくてまことに申しわけないのですが、中途半端なところで話が終わるだろうと思います。まあいろいろあるんですけどね、率直にいいますとね、宗教といえばもう浄土真宗です。いろんな宗教があって浄土真宗があるんじゃないしに、宗教といえばもう浄土真宗です。浄土真宗を宗教というんです。はっきりしとるんですよ。そんなこというと“何を勝手なホラを吹くんだ”といわれるかしらんけれどもそれは事実でございますから。浄土真宗のみが全人類に開かれた真に永遠にして普遍なる真理、働く真理です。宗教というのはとにかく生きとらなあかんですね。死んでしもうた宗教というものは。ところがどうでしょうかねえ。僕らは宗教を学ぶ学ぼうて、学びながら自分がなかなか生きられん。自分が生きられんということは学んだ宗教を殺しとるということです。またえげつないことを言いますと、真宗を利用して生きとるんですね。親鸞を利用し真宗を利用して生きとるから、だから自分も生きとらんし利用した真宗も死んでしもうとるんです。

とにかく宗教というのは生きとらな話にならんですね。親鸞さまは実は本当の生き生きとして躍動しておるそういう働きに会われて、それを浄土真宗と表明なさったのでございましょう。だから『教行信証』のうえでも浄土真宗というのは、真宗というのは何遍も出てきますが、浄土真宗というのはたしか前後三回くらい出てくるとは思いますけれど、そこに親鸞聖人のいわれる浄土真宗に会ったと、しかもその浄土真宗は「在世・正法・像末・法滅」ですね。時代のいかに問わず社会のいかに問わず一切の群萌にこれが働いて止まない。そういう生きた真実ですね。そのことを明らかになさったんですけども、それが今あなたの上に、そういう浄土真宗が開かれておるか開かれておらんか、これはもう一人一人の問題でございまして、だれを頼むわけにもいきませんし、ただ一般的な話をしますと、もう時間がないので余分な話はできんですけど、宗教の普遍性ということと個人の責任というもの、これは決して別のものではないと思うんですね。

宗教というものの、何といいますか誤解といいますかねえ、独断といいますか、そういうことがあまりにひどい。とくに最近宗教の名を語っておりながら何にも宗教でない。それこそ親鸞さまのいわれる、形は宗教でも中身は全部人間性を限りなく限りなく奪い取って行く、そういう魔の宗教であるとそう言った方がい

と思うんです。これは厄介ですねえ。いまそういう話をしていますとどうにもこうにも始末におえんようになりますけれども、触れませんが。

それで、時代、時機相応とか時機純熟ということで懇ろに宮城先生に教えていただいたんですけれども、どういったらいいんですかねえ、仏教の言葉でそれを日本語でいえば、命と光りと。帰命無量寿如来、南無不可思議光如来と親鸞が正信偈劈頭にその帰依処を明らかにしとるわけです。いうならば、なんまんだぶつ、なんまんだぶつということをやまず劈頭に出しとるわけですね。それは何といいますかね、まあ親鸞の言葉でいいますと、本願の名号、その本願の名号というのは名告りであり、呼びかけであり、光りであり、働きである。それは我々の現実の世界を限りなく照らし、限りなく破り、限りなく開き、解放していく、そういう働きである。そこに地上において浄土の世界を開いていくという、一人一人の上に開いていく、そういう働きを、いうならばそれを本願といいます、それを先ほど言いましたように、最近ではどこから言い出されたか知りませんが、命の願い、本願というのは命の願いであると。

それはその言葉になるまでに、たとえば清沢先生が「至奥にして至盛の要求である」と、こういうふうな言葉でいわれています。最も内なるものであってもそれが身一杯に溢れるような、そういう止むに止まれざる要求、純粋要求、それを本願の名号、なんまんだぶつというんだと。だからなんまんだぶつというのは万人に共通するところの純粋要求。それでその共通という場合にですね、何が共通なのかといいますと、ここにおりますものは共通なるものはほとんどないですね。顔が違うように思想が違い、趣味が違い、民族が違い、言葉が違い、同じものは何もないのです。ところがただ一つ共通なものがあるのです。それは何かというと命です。これは日本人の命、アメリカ人の命、そんな区別はありません。命の本質的構造というものは今も昔も何も変わりません。しかも一番大きな問題は、真宗の信心を語る以前において大きな問題は、皆さん方もみなおっしゃることなんですけれども、要するに命というものを自分一個の私有ということが常識になっている問題でございます。私の命だと。これがほとんど常識になっています。ところが僕らの子供のころまでは家庭におってもそういうことはありませんでした。お前の命を自分の命と思うたらあかんぞと。如来様からいただいた、お預かりしたお命やから大事にしなけりゃいかんぞと、言葉でいうならそういう中で育ってきました。ところが現在は命といたらみんな俺の命、ということがもう常識になっています。資本主義の私有財産制度というものが、そこまで徹底してきたわけですね。本来私すべきものではないものまでも、私するということが何の疑問もない。そして一人一人の尊厳性を守ることが我々の生き方だと。

だから逆に言いますと、自分の命を守るためには他を傷つけてもかまわない。それは個人の場合でも民族の場合でも、ずっと一貫している問題ですけどね。まあ簡単にいいますと、そういうところにしかも僕らが日常的な生命感覚といいますか、そういうのが常識化している。それで実は、光明無量、寿命無量といわれましても、全然響いてこないんですね。もっと別の言葉でいいますと、我々の中から歴史、社会という言葉でいうと良くないのですけれども、要するに我々の中から時間的にも空間的にも永遠感覚というものがなくなったということです。永遠無限感覚、あるいは永遠無限を感じる能力です。そういうものがなくなってしまったのです。

こんな問題を簡単に言えませんが、国を挙げてそういう日本民族全体の世界観歴史観というものを大きく変えていったわけですね。そして絶対なるものは何かというときに、国家と。国家信仰というのものにもっていった。そして仏教はすべてその国家を守るための仏教だ、鎮護国家。これもこないだあるところで話してね、ちょっと気が付いたのですが、僕らは鎮護国家の仏教がおかしいといいますけども、鎮護国家にも二つの意味がありましてね、日本の現実の政治を仏教の精神によって、現実の日本の国というものがあくまで仏教の精神に立って営まれて行くと、そのことが本当に国を守るということの意味なんだと、そういう意味での鎮護国家もいえると思うんです。ところがそれは後ほどになりますと逆になりましてですね、現在の国家体制を仏教という宗教の宗教的権威をもって現実の体制国家を守るという意味に変わって行くんですね。だから鎮護国家と一口にいいますが、そういう言葉自体が非常に大きく方向転換をして行きます。

従いまして前に言っていますような、浄土といっても本願といっても、それはどうしても頭の理解になってしまう。ということはもっと言いますと宗教というものも分からなくなるということですね。去年から今年にかけていわゆる宗教に関する大事件としてはオウム真理教とそれから今年四国の安西君あたりがしょっちゅう出てきますけれども、あの最高裁大法廷における靖国裁判というものが行われました。この二つが最近とくに去年と今年にかけて行われた宗教に係わる重大な事件でございますね。

ところが裁判でどういう判決が出るかということでみんな関心が集中しておりますけれども、しかしその裁判というものは宗教裁判ではございませんですね。靖国神社が悪い宗教だから参加してはいかんとか、オウム真理教も悪い宗教だからとそういう宗教に対する判断を裁判所ができるはずありませんし、したら大騒動でございます。信教の自由に反するのですから。だから今日の新聞をまだ見ておりませんけれども、昨日ですか麻原某の裁判で元の弟子たちが傍聴席の一番前で麻原さんのブツブツ言う独り言を一生懸命に食い入るように聞いている、そういう熱心な信者さんが今も相当いらっしゃるわけですよ。だから裁判所はそんなことを裁くんじゃないですね。ただその教団のやったことが犯罪事件であるかないか、犯罪であるかないかということを裁くんです。宗教そのものを裁く宗教裁判ではないですね。靖国神社もそうです。今まで靖国神社は超宗教であった。それが今度最高裁の大法廷では靖国神社ももろもろの宗教の中の一つの宗教であるということを明らかにしたんです。呆れてものが言えんくらいです。こんな当然なことを、靖国神社自らが一つの宗教法人として自分を納得させてきたんでしょ。靖国神社はそうなれば当然特殊な一宗教に過ぎません。ところがその当然なことを裁判所がそれを認めるために15年かかったんです。あの紅顔の美少年であった安西君が今では熟年も熟年ですね。あれだけのことで15年かかった。そして何が決まったかという靖国神社も一つの宗教であると。当たり前のことが決まっただけのことです。こういうところにも僕は真宗がはっきりしないということのいろいろな重大な問題があると思います。

それではどの宗教を選ぶか、これは一人一人の選びですね。そんなことを政府にも裁判所にも任せることはできません。どのような宗教を一人一人が選ぶか。その一人一人の選びが民族の選びを決定することになります。民族の選びを決定するということは、同時に国家の選び、ひいていえばそれが全人類の帰依処、全人類の帰依処を明らかにする、そういうことにつながる問題だと思えますね。そここのところに行きますと、個と全体ということの関係が、これがまたどうも我々がなござりにしてきたことではないかと思うんですね。全体を強調すれば個が抑圧される。個の独立を強調すれば全体の秩序が弱くなる。そういう確かに対立的な面があるんですけども、しかし、親鸞聖人は本当に先ほど言いましたように個が本当に生きるということはそのままそれが一切衆生が共に生きるという、そういうことを離れてはあり得ないのであるし、一切衆生が共に純粋要求といいますか、その純粋要求は要するに全地球的な規模でもってすべてのものに当てはまる、そういうすべてのものの中に流れておるそれを如来の本願と、こう言ったに違いないと思うんです。

まあ、そういうことについて私共がこうして『教行信証』に学ぶということはそういうことに対する一人一人の責任です。そういうことは憲法に任すわけにもいきませんし裁判所に任すわけにもいきません。一人一人がその真実に生きる、命の要求といいますか純粋意欲といいますか、そういう要求に生きるというそのことが何よりも急がねばならん事であろうと思います。

五

それから、いろんなことが一杯ありますが、時間が来たら来たというところでぶち切って止めますから、いろんなことが言われるんですね。それじゃあそのような親鸞聖人が明らかになさった宗教とこういいますけれども、実は親鸞聖人がそのことに目覚められ、そのことに生きられたとこういいますが、実は逆に、親鸞さまがその歴史と時代社会を貫通するようなその大きな働きに親鸞さまが付き動かされ、そして目を覚まされ、そしてそれに押し出されて90年の生涯を歩み続けてくださったということがあります。

それで僕らが浄土真宗を学びながらそれが明らかでないということがもしあるとするならば、それは、じゃあどうしたらいいか、ということなんですね。ところが親鸞聖人におたずねをしますとどうしたらよいか

というような問題の発想がないんですね。どうしてもだめだという発想だけなんです。何をやってもだめなんだという発想なんです。考えてみますとね、僕らここで学んどるけどね、こんなものは文部省の行き方と正反対のことをやとるんです。文部省はこんなことをやとったら教育になりません。学校は。人間はなんぼ努力しても煩惱具足の凡夫でしょう。何をやってみても進歩もなければ改変もなければ何がどう変わるということもないのでしょう。だからね、こんなことをうっかり浄土真宗を文部省の国家の教育と何も問題がないんだなんて思うとったらとんでもないことですね、真宗に生きるということは、実際の、とくに戦後の、日本の戦後の国家、経済、政治、教育そういうものと本来ならば厳しく緊張関係をもたねばならんです。

ところがこれが案外もてないということがあるんで、これは時間がありませんから言いません。言いませんがいわゆる戦後の、今まで日本の国になかったいわゆる近代ヒューマンイズムに基づくところの近代教育、それが始まって戦後50年、もう半世紀過ぎました。それに対して戦争中全面的に親鸞の名において国策に協力した大谷派教団が親鸞に帰ろうと、いうならば親鸞に帰ろうという同朋会運動、これも同朋会運動35年とこういいますけれども、その前に同朋生活運動というものを加えて考えてみますと、戦後50年とあまり変わらないのです。そして一方は親鸞に帰ろうという信仰運動が戦後の50年の近代化ヒューマンイズムの運動とからまりあいながらやってきたということです。そしてそのことの分限といいますか、宮城先生の言葉を拝借させていただきますと、分限が明確でないままやってきている。いまだに明確でない。このこともいま親鸞に学ぶ我々にとって、どうしても明らかにしなければならない大きな責任があると思います。やっぱり現代に生きる真宗である限り現代の主張と対決しなけりゃいかん。現代に生きんとする限り現代の思想、現代の主張とある意味で厳しい緊張関係にならざるをえない、ということはある意味で避けることはできないんじゃないかと思うんですね。そういうことがひとつあると思うんです。そのためにはどうしたらよいかといえば、先ほどいいましたように「ため」という方法論はないんです。ただ一つ、いわれることは我々が真宗に遇うと、真宗を理解するとか了解するということがじゃなくて真宗に遇うか遇わんかと。浄土に生まれるか生まれんかということでありまして、そのことは浄土に生まれた方々の、善き人の教えをこうむる以外にない。なんぼ腕組んで考えておってもだめですね。とにかく既に生まれた方々がたくさんいらっしゃる。それは何も立派な名前の出た方々ばかりではありません。私共が北陸で育って、名もない田舎の婆ちゃんやお爺ちゃん何の教養もない人だけれども、生涯なむあみだぶつ、なむあみだぶつといっていかなる状況の中でも浄土を憶念しそして念仏を正念されていかれた方々がたくさんいらっしゃいます。

だからそういう人達を通してでなければ浄土真宗に我々が生きるということはほとんど不可能である。ところが現在はどうなるとるかという、徹底的な人間不信の時代ですね。善知識とか善きひとを求めるなんてことはほとんどないでしょう。だからその人間不信の時代にですね、善きひとに遇うということがほとんど不可能でしょう。しかも逆に反対に善きひとに遇うたということになると、今度はその善きひとのファンになっていくですね。そして先生を偶像化してしまう。師弟共に健康な人間性を失ってしまう。そういう問題がありますね。そこにひとつの人間信頼ということがない。親鸞は本来人間が人間を信頼することはできるのだと言い切っておりますが、それじゃあその人間を信頼するのは何かと。敵も味方も対立するものも共通してそこに働くところのいうならば命の要求。そこにお互いが耳を傾けていくということしかないのではないのかと。

今日さっきお昼にソバを食って帰って来ながら話とったんですけれども、親鸞聖人のお手紙を読みますとそういう人々を全部「ひと」と、とくにお手紙の中では「ひと」という言葉で言ってらっしゃいます。「信心のひと」「念仏のひとびと」そうかと思うと、仏法に「さまたげなさんひと」妨げをするのも人です。そして世の人々をたのんで念仏を広めようと思っておりますが、要するに親鸞聖人はいかなる立場のものもみな「ひと」と言われます。これは簡単なことですけどもですね、日本語の対人的な日本語というのは非常に複雑でございまして、自分よりも目上の人をさす言葉と目下の人をさす言葉しかないんです。同朋という言葉を表す日本語がないんですね。あなたといえば目上の人です。テメエといえば目下、お前といえば目下になります。そんなことをいって下に見たら女性差別だといわれると僕は一日も生きていけません。内の家内はな

んていうたらけしからんと言われます。ところが僕らの先輩になるともっとひどいんでね、「内のとんさい」とか「内の愚妻は」などとまあとんでもないことをいっとったんですけど、だからといって平等の言葉がないんですよ。これは無理ですよ。若い人はこのごろ「連れ合い」はといっていますがなんか落ち着きませんね。何かいい言葉が出てくればいいと思うんですけど。何かそんなわけでね、非常に文化全体がひとつ問題をはらんでいるのですよ。だからそういう文化の中で親鸞聖人の教えを了解していくということになりますと、どうしても一つの垢がつくんです。そういう問題を十分承知のうえで親鸞の直接の言葉に触れるかそうでなければ浄土に生きた人、真宗に遇った人、そういう人がまだ無数にいらっしやいます。ただこちらが人間不信であるためにそういう人がおられても目に入らただけの話です。そういうことにも素直になることが大事なんじゃないかと思います。もう時間がなくなりました。

それからもう一つは現実のいろいろな事実に触れて、厳粛な事実によって自分の念仏の信心だと思っていたのが手作りの信心であったということが毎日毎日批判にさらされているわけですね。そういうことにも私たちが今まであまり厳密に考えて来なかったんじゃないかということもありますし、もう一つの問題は現実といいますけれども、僕らの生きておる世界が本来の世界でなくなっているという大変なことになっているんです。現在我々が身を置いている世界はみな本来の自然の世界ではなくて人工世界の中を生きとるんです。いったい世界とは何か。今まで生きてきた世界というそのものが、内容が変わってしまっている。世界全体は人間を非人間的にするような構造になってきたんです。そういうときに諸仏という概念があるんですけども、その現実を通して諸仏の教えを聞いて行くという非常に困難なことになってきたと思うんです。親鸞は「善知識にあうことも、おしうることもまたかたし、よくきくこともかたければ、信ずることもなおかたし」ということを言っていますが、それが現代においては具体的な現実となって、我々が真宗に聞いて行くということがより困難な状況になってきたということがあると思います。

もう時間が来ました。言いたいことがまだまだ一杯あるんです。一杯あるんですけども皆さんのご予定の時間もありましょうから、非常に中途半端ですけども、これで終わらせてもらいます。「帰依処」という題をいただいて帰依処一般を論ずるのではなくて、はたして私は聴聞の場所に身を置き、それから教えを聞いてはおるけれども、私において真の帰依処は確立しておるのかどうかそういうことが問われておるわけでございます。これで終わります。